

保育者養成校の音楽系科目における オンライン授業の効果と課題

—教員と学生の意識調査をとおした検討—

岩佐 明子、命婦 恭子

本研究は、保育者養成校の音楽系科目におけるオンライン授業について、教員を対象にグループ・インタビューを実施し効果と課題を探った。また、学生を対象にオンライン授業を受講した直後と、対面授業終了直後に、オンライン授業に関する質問紙調査を実施し回答を比較した。学生はオンライン授業より対面授業の方が受けやすいと考えていることが明らかになった。また、調査結果から、ピアノ・弾き歌い指導におけるオンライン授業と対面授業に適した指導内容を分類した。

キーワード：オンライン授業、音楽教育、保育者養成

1. はじめに

2020年度は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による感染の急激な拡大の影響により、大学等の高等教育機関は、これまで対面で実施してきた授業(以下、対面授業¹⁾)を、オンラインでも実施可能にすることが求められた大きな転換の年となった。文部科学省が令和2年4月24日に発表した「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について(令和2年4月23日時点)」の調査結果によると、「全体の約9割の大学等において、学生を集めて行う通常の授業の開始時期等を延期している²⁾。」「教室外の学生に対して行う授業(遠隔授業)の活用については、ほぼ全て(98.7%)の大学等で実施又は検討する方針³⁾」と報告されている。このことから、2020年度開始直後から、ほぼ全ての大学等でオンライン授業の実施方法や内容などを検討することになったことが確認できる。本研究で調査対象とするA短期大学においても例外では無く、授業開始日を3週間延期し全ての科目をオンライン授業で実施することとな

り、ICT(Information and Communication Technology)の活用を余儀なくされた。

2020年度に実施された、コロナ禍における保育者養成校の音楽系科目のICT活用の教育効果と課題に関する研究結果は、様々な授業実践の取り組みとともに挙げられている。山内(2021 p.66)は、音楽系科目のオンライン授業内で同時双方向型⁴⁾で実施したピアノや弾き歌いの指導について、教員と学生を対象に、オンライン授業と対面授業に関する質問紙調査を実施しそれぞれのメリットやデメリットを探っている。対象の学生は対面授業の受講経験がなく、オンライン授業のみ受講している。教員の所感として、オンライン授業は「教育効果は対面のほうが高い」、「拍やリズムを体感させづらい」、「ペダルの響きが聴き取れない」、「生音を聴いてみないと本当の実力がわからない」等から、教員が授業内容の質を疑問視していたことは明らかであると述べている。また、学生と教員がオンライン授業において共通してメリットと認識した事柄を3つ挙げ「①コミュニケーションが取りや

すい、②感染リスクの回避、③移動（通学・通勤）が不要」と述べている。また、葛西（2021, p.12）はオンライン授業のみ受講した学生を対象に調査を実施し、メリットとして「プライバシーの保障」、「リラックス、集中できる環境」、「通学（時間）の節約」、「練習時間の確保」、「感染リスクの回避」を挙げ、デメリットとして「通信環境（状況）による影響」、「孤独感」、「音出し環境の確保」、「質問のしづらさ」を挙げている。また、ICT機器のタイムラグを「ピアノ弾き歌い指導の質に関わる致命的な問題」と述べている（p.14）。また、小西（2021, p.59）は、弾き歌いの実践報告として、オンライン・分散・対面授業を経験した学生にアンケート調査を行った結果、「コード奏や簡易伴奏についてはオンライン授業でも指導したが、やはり対面で直接教えた方が学生たちには分かりやすいようであった」と述べている。これらの先行研究では、コロナ禍で余儀なく実施した、教員や学生が捉えたオンライン授業の教育効果や課題について質的な検討がなされている。

しかし、オンライン授業のみ経験した学生と、その後に対面授業も経験した学生がオンライン授業をどのように捉え直したかを量的に検討した研究は見当たらない。また、これらの実践の結果を踏まえた上で、保育者養成課程における音楽系科目の、オンライン授業での指導に適した内容と対面授業での指導に適した内容を明確に分類し、論じた先行研究は見当たらない。

文部科学省による Scheem-D⁵⁾ の取り組みにみられるように、今後の大学教育においてデジタイゼーションは欠かせないものであり、ピアノや弾き歌いの演奏技術の指導においても、オンライン授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド型授業を実施し、教育効果を深めていくことが望ましい。コロナ禍において、オンラ

イン授業と対面授業を経験せざるを得なかった教員と学生が、各授業の特質をどのように捉えたかを調査し、保育者養成校の音楽系科目の演奏技術の指導における、対面授業及びオンライン授業の特質に応じた指導内容を検討することは、教育効果を高める上で意義有ることだと考える。

2. 研究の目的

2020年度にA短期大学で開講された音楽系科目「保育のための音楽Ⅰ」（1年前期）、「保育のための音楽Ⅱ」（1年後期）、「保育のための音楽Ⅲ」（2年前期）、「保育のための音楽Ⅳ」（2年後期）の担当教員と受講生を対象に、どのようにオンライン授業を捉えたかの調査を実施した。本稿では、担当教員を対象に調査した研究1と学生を対象に調査した研究2を記す。

研究1では、担当教員がどのようにオンライン授業を捉えたのかを考察する。2020年度前期終了後に、教員を対象としオンライン授業に関するグループ・インタビューを実施した。インタビューの分析を行い、教員が捉えたオンライン授業の教育効果と課題について明確にする。

研究2では、学生がどのようにオンライン授業を捉えたのかを考察する。まず、2020年度前期にオンライン授業を経験した直後の学生を対象に質問紙調査を実施し、学生がオンライン授業をどのように捉えたかを分析する。次に、それらの学生の中から2020年度後期に対面授業を経験した学生を対象に同じ調査を実施し、オンライン授業と対面授業の両方を経験した後の学生が、オンライン授業をあらためてどのように捉えたかを分析する。

本研究は、教員が捉えたオンライン授業の教育効果及び課題と、学生がオンライン授業をどのように捉えたかを合わせて検証することを目

的とする。また、オンライン授業を経験した前期末の学生と、その後対面授業を経験した後期末の学生の回答を分析し、学生のオンライン授業に対する認識がどのように変化したのか検証する。その結果を踏まえ、今後の音楽系科目のハイブリッド型授業において教育効果を高めるために、オンライン授業での指導に適した内容と対面授業に適した内容を分類した図を作成する。

3. 授業の概要

A 短期大学 2020 年度に開講した音楽系の 4 科目「保育のための音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の概要を示す。授業形態は 4 科目とも、1 クラスを 2 グループに分け、ピアノの個別指導とグループ指導を 45 分の入れ替え制で実施している。ピアノの個別指導の内容は、ピアノの楽曲や子どもの歌の伴奏法、弾き歌いである。グループ指導の内容は、「保育のための音楽Ⅰ・Ⅱ」は声楽と音楽の基礎知識、「保育のための音楽Ⅲ」は合奏、「保育のための音楽Ⅳ」はリズム遊びの指導法である。

コロナ禍前の 2019 年度は「保育のための音楽Ⅰ・Ⅱ」は全ての回で対面授業を実施した。ピアノの個別指導の教室は、グランドピアノとアップライトピアノが 1 台ずつ設置されている防音室である。教員 1 名と学生 2～3 名が入室し、1 名の学生がレッスンを受けている間、他の学生はレッスンを聴講し学ぶように指導している。グループ指導の教室はグランドピアノ 1 台が設置されており、1 クラスの半数の人数が 1 つの教室で指導を受けた。「保育のための音楽Ⅲ・Ⅳ」は 2020 年度に新規開講された科目のため、2019 年度は開講していない。

2020 年度前期に実施した「保育のための音楽Ⅰ・Ⅲ」は、新型コロナウイルス感染症の影響

により全ての授業回（15 回）をオンライン授業の形態で実施した。ピアノの個別指導は、授業の開講日時に自宅からリアルタイムでやり取りができる同時双方向型のオンライン授業⁶⁾を、グループ指導は、授業内容を動画で配信し、授業の開講日時から 1 週間以内に課題の提出を求めるオンデマンド型のオンライン授業を実施した。

ピアノの個別指導は、教員はパソコンもしくはタブレットを使用し、学生はスマートフォンを用いてやり取りを行った。学生には、手元を必ず写すように伝えた。

2020 年度後期開講科目「保育のための音楽Ⅱ」、「保育のための音楽Ⅳ」は、全ての回を対面授業で実施した。しかし、ピアノの個別指導においては、従来使用していた防音室が密閉空間になるため使用できなかった。そのため、電子ピアノが 50 台設置されている教室で、学生、教員ともにヘッドフォンを装着し授業を実施した。

4. 倫理的配慮

本研究は、音楽系科目の担当教員と「保育のための音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を受講した学生を調査対象者とした。各調査は、筆頭著者の所属大学の研究倫理委員会の審査・承認を受け実施した（申請番号 2020-1）。調査対象者には、口頭及び文書で、調査の目的と方法、データ処理方法を説明した。また、本研究の参加、協力は自由意志によるものであり、不利益は一切発生しないこと、個人情報とは特定されないこと、途中で撤回が可能であり、調査結果の公表に際しては個人名を特定しないことを確認し、同意書を得た。

5. 研究 1

教員が捉えたオンライン授業の教育効果と課題、指導上感じた所感に関する調査を実施した。以下に、研究方法及び研究結果を記載する。

5-1 研究方法

(1) 調査対象者

2020 年 8 月上旬に、A 短期大学で音楽系科目を担当している教員 16 名に研究説明書を配布し、協力者を募った。協力に同意を得られた教員 11 名（内訳：ピアノの個別指導担当教員 9 名、音楽理論及び声楽の担当教員 2 名）を対象とした。

(2) 調査時期

調査は、2020 年 8 月 1 日、9 月 1 日、9 月 7 日の 3 回に分けて実施した。調査対象者は、3 回の内いずれか 1 回に参加した。

(3) 調査内容

調査内容は、2020 年度の前期にオンラインで授業を実施した結果、教員が感じたオンライン授業の教育効果、課題、更に指導上感じた所感である。

(4) 調査方法

調査対象者に 1 時間 30 分から 2 時間程度のインタビューを実施した。インタビュー方法は「オンライン授業の実施を振り返って」をテーマとして設定した非構造化面接とした。なお、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、web 会議システムを用いて実施した。インタビューは、他者と意見交換を行いながら進めることにより多様な意見が出やすくなると考えたため、個別ではなくグループで実施した。また、日程の都合により 3 グループに分けた。ピアノ指導の担当教員と声楽及び音楽の基礎知識のクラス授業担当教員で聴き取る内容が異なるため、グループを別にした。また、どのグループにも指

導経験年数が 10 年以上の教員と 9 年以下の教員を配置し、偏りが出ないように配慮した。

(5) 分析方法

インタビューの音声記録から、発言内容の要素を抽出したカードを作成した。更に、それらを KJ 法におけるグループ分けの手法を用い、カードの内容を適切に表すラベルを作成し各カテゴリーに分類した。

5-2 研究結果

発言内容の要素を抽出したカードは 135 枚であった。カードの内容を表すラベルを作成しカテゴリー別に分類したところ、第 1 段階の分類では 41 項目に分類することができた。更にそれらをカテゴリー別に分類したところ、第 2 段階の分類では、14 項目に、第 3 段階の分類では 7 項目に、第 4 段階の分類では 3 項目のカテゴリーに分けることができた。分類結果を表 1 に示す。なお、() 内の数字は、発言の要素を抽出したカードの枚数を示す。

本稿では、ピアノ及び弾き歌いの授業で用いた同時双方向型について語られた内容を取り上げる。「自宅における教育環境」のカテゴリーでは、教員は短期間で ICT 機器の購入やオンライン授業の実施方法の習得等の準備を行ったこと、学生は自宅で受講できる環境があることが分かり、オンライン授業に向けて環境が整えられたことが分かる。

「オンライン授業の現状」のカテゴリーでは、「メリット」として、学生は通学の負担が無いためか出席率がよく、受講者間で話せないため教員と意欲的に向き合う姿勢が見られたことが確認できた。また、教員が ICT 機器の扱いに慣れたため、指番号が書かれた楽譜や動画等のやり取りが行われ指導が効率的に行われたことが確認できた。「デメリット」としては同時双方向型

表 1 教員がとらえたオンライン授業の現状と課題

第 4 段階 カテゴリー	第 3 段階 カテゴリー	第 2 段階 カテゴリー	第 1 段階カテゴリー（一部抜粋）
教育環境 (36) 自宅における	教員の環境 (28)	教員は、ICT 機器の購入やオンライン授業の実施方法を学ぶ等準備が大変だった (21)	・オンライン授業のためにパソコン、タブレット、マイク、三脚などを購入し使用方法について学んだが、準備が大変だった。
		慣れると便利 (7)	・システムに慣れると要領よくできる。
	学生の練習環境 (8)	ほとんどの学生は自宅の電子ピアノで受講 (8)	・学生は自宅で練習する環境はあるが、ほとんどが電子ピアノを使用しており、強弱が付けられない楽器も見受けられた。
オンライン授業の現状 (81)	メリット (40)	ピアノの授業ではよく練習し意欲的に学ぶ姿勢が見られた (23)	・出席率が良く遅刻が無い。 ・例年より、よく練習をしている印象がある。
		授業外にメールでやり取りを重ね効率的な指導ができた (9)	・教員と学生間でメールで指番号を書いた楽譜や動画等のやり取りを頻繁に行ったため、指導が効率的に進められた。
		時間のロスが無い (8)	・移動の時間が無く、補講の時間等も取りやすい。
	デメリット (32)	同時双方向型は画像や音質の乱れがある (12)	・同時双方向型は画面が固まる、モザイクになる、使用しているスマホが熱くなる、音質が悪い等、画像や音質が乱れることがある。
		同時双方向型は演奏技術を伝えきれない (8)	・同時双方向型は画像と音声にずれが生じるため強弱、一定のテンポを保つ等の演奏技術が指摘しにくい。
		同時双方向型は身体の使い方や顔の表情が確認しづらい (7)	・同時双方向型のピアノの指導時に学生は手元のみを映しているの、演奏時の身体の姿勢、表情、ペダルの踏み方等を確認することができない。
		オンデマンド型は学生の取り組み方を把握できない (5)	・音楽理論のオンデマンド型授業は、学生の様子や課題への取り組み方が分からない。
	コミュニケーションが重要 (9)	同時双方向型はコミュニケーションが可能ではあるが初対面の相手とは交流しづらい (9)	・2 年生はこれまでに対面で友人関係を作ることができていたため、オンラインでもコミュニケーションが取れていた。 ・初対面だとコミュニケーションがしづらい。
今後の授業実施の提案 (18)	オンデマンド型授業は教材づくりの工夫が必要 (12)	オンデマンド型授業の動画作成の技術を支援してほしい (9)	・オンデマンドの教材づくりを専門の技術者に補助してもらいシステムティックに作成できないか。
		授業の実施方法に工夫が必要 (3)	・オンデマンド型授業の各回の視聴回数を把握できるシステムが必要である。
	今後は対面とオンラインを組み合わせた授業 (6)	オンライン授業と対面授業の利点を活かす (6)	・今後はオンライン授業と対面授業の利点を活かしてハイブリッド型で実施することが望ましい。

注 () 内は回答数

では画像と音声にずれが生じるため指摘しにくいことや、強弱や一定のテンポを保つ等の演奏技術が伝えきれないこと、学生はスマホを使用しているため、手元のみが写され身体の使い方や顔の表情を確認できないことが挙げられた。また、知っている学生同士はコミュニケーションが取れるが、初対面の学生はコミュニケーションが取りづらいことが挙げられた。

「今後の授業実施の提案」として、同時双方向型と対面型それぞれのメリットを活かし、今後はそれらを組み合わせて授業を実施していくことが抽出された。

6. 研究 2

学生が感じたオンライン授業のメリットとデメリットに関する調査を実施した。以下に、研究方法及び研究結果を記載する。

6-1 研究方法

(1) 調査対象者

「保育のための音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の受講生を調査対象とした。1 回目の調査は、前期科目の受講者を対象とし、回答数は 1 年生 109 人（回答率：87.2%）、2 年生 104 人（94.5%）であった。2 回目の調査では、後期科目の受講者を対象とし、回答数は 1 年生 117 人（96.7%）、2 年生 50 人（100%）であった。1 回目と 2 回目の両方に回答したのは、1 年生 100 人、2 年生 43 人であった。

(2) 調査内容

本調査のために作成した「音楽のリモート授業についての学生の意識尺度」を用いた（命婦・岩佐 2021, P-245-P-246.）。36 項目について「全くあてはまらない (0)」から「よくあてはまっている (5)」まで 6 件法での回答を求めた。2 回の調査で同じ尺度を用いて、それぞれの時点か

ら前期のオンライン授業を振り返って回答するように教示した。

尺度作成にあたり、36 項目は「オンラインのピアノの授業中のことについて (14 項目)」「授業の通信環境について (3 項目)」「授業時間外のことについて (4 項目)」「自宅での練習について (4 項目)」「自分の演奏技術について (5 項目)」「オンデマンドのクラス授業について (3 項目)」「後期に実施される対面授業について (3 項目)」の 7 つのカテゴリーに分類されている。このうち「オンラインのピアノの授業中のことについて」では、「リモート特有の指導の受けにくさ」「リモート特有の参加しやすさ」「学生との関係」「家族との関係」の 4 つの成分を抽出した（命婦・岩佐 2021, P-245-P-246.）。この尺度は、学生に対する聞き取りによる予備調査の結果から抽出された項目を列挙したものであり、カテゴリーの分類を行なっているが、項目得点を合計して何らかの特性を示す変数とすることを目的として作成された尺度ではない。そのため、分析は項目ごとに行う。

(3) 調査手続き

1 回目の調査は 2020 年 10 月、2 回目の調査は 2021 年 1 月にクラス単位での授業終了後に実施した。その授業の担当者でもある著者 1 名が、質問紙を配付し、回答は任意であること、授業の成績等には関係がないことを説明した。回答は無記名でおこない、その場で回収した。授業の欠席者など一部の回答は、後日提出された。

調査結果は集計して統計解析をおこなった。全ての分析は SPSSver.17 を使用し、欠損値は分析ごとに除外した。

6-2 研究結果

(1) 項目ごとの回答の偏りの分析

1 回目の調査で回答を得た 36 項目について度

数分布を確認したところ、一つの選択肢を40%以上の回答者が選択している偏った回答が7項目でみられた。項目1「他の人がレッスンを受けているあいだに自分で練習することができた」では、59.9%が「よくあてはまっている」と回答していた。項目12「弾きうたいで、自分の声がかきちんと先生に伝わっていなかった」という項目で、40.9%が「全くあてはまらない」と回答していた。授業の時間以外のことについての4項目のうち、項目19「自分が演奏している動画を送ると、先生が指導してくれた(49.5%)」項目20「授業のシステムを使って、先生が見本の動画を送ってくれた(44.6%)」項目21「動画以外にも、メールで指使いなどの写真を送ってもらい理解することができた(42.8%)」の3項目で多くの学生が「全くあてはまらない」と回答しており、これらを活用したのは、一部の学生にとどまっていることが示された。自分の演奏技術を問う質問のうち項目28「レガートとスタッカートができるようになった」では、42.0%が中央の選択肢を意味する「3」を選択しており、適正なテンポや正しい指番号で弾けるようになったかを問う項目に対する回答に比べると、自己評価が曖昧な学生が多かった。後期におこなわれる対面授業について項目34「人前で演奏しないといけなくて緊張する」に41.5%が「よくあてはまる」と回答していた。

以上のことから、通信環境に不安を感じている学生は一部で、多くの学生は対面授業よりもリラックスして授業を受けている様子がうかがえる。また、リモート授業でも演奏技術が身についたと感じている学生が多いが、自己評価が曖昧なところもあり、教員からの明確なフィードバックが必要であることが示唆された。

(2) 1回目の調査における学年間の比較

学年と回答選択肢でクロス集計し、 χ^2 検定を

おこない、有意な項目は残差分析をおこなった(表2)。同じ検定を繰り返すことによる第一種の過誤をできるかぎり避けるために、有意確率が1%未満のものを採用した。「オンラインのピアノの授業中のことについて」の項目のうち、「リモート特有の指導の受けにくさ」の項目で、2年生の方が指導の受けにくさを強く感じていた。ピアノの授業中に他の学生の目を気にせずに演奏できた(項目8)としている学生と、他の学生に励ましてもらえた(項目9)としている学生は2年生のほうが多く、リモート授業の経験しかない1年生では他の学生との関係が希薄であることがうかがえた。リモート期間の練習の成果に自信を持っている(項目35)のは2年生の方が多く、自宅と学校の楽器の違いを不安に思っている(項目36)のは1年生の方が多かった。

(3) 学年ごとの1回目と2回目の相関と差の分析

1回目と2回目の回答の関連性をみるために、Spearmanの相関係数を算出した(表2)。また、1回目と2回目の回答の平均値を算出し、t検定をおこなった。ここでも、有意確率が1%未満のものを採用した。1年生では、オンラインのピアノ授業における「リモート授業特有の受けにくさ」の項目において、相関は中程度($r=.28 \sim .46$, $p<.01$)であるが1項目をのぞいて平均値が有意に高くなっており($t(97 \sim 99) = 2.80 \sim 4.47$, $p<.01$)、2回目の調査の方がリモート授業を受けにくかったと振り返っていた。2年生では有意な差はみられていない。

「自宅での練習について」の項目では、1回目と2回目の回答に相関がみられ($r=.46 \sim .60$, $p<.01$)、回答が安定していることがわかるが、項目22「家に居る時間が長いので、練習する時間が充分とれた。」という項目では、2回目のほうが、練習時間がとれたと回答していた($t(99)$

表 2 項目ごとの学年比較と 1 回目と 2 回目の相関および差の分析

項目 番号	項目内容（簡略化して掲載）	χ^2 検定	1 年生		2 年生	
			r	t	r	t
オンラインのピアノの授業中のことについて（14 項目）						
A 2	音楽的な表現の指導は分かりづらいつと感じた。	18.76 1<2**	.28 **	2.91 **	.37	0.31
A 3	リモートだと質問しづらいつと感じた。	1.98	.34 **	3.19 **	.37	2.06
A 5	先生の指示が聞き取れないことがあった。	7.12	.46 **	4.47 **	.46 **	0.33
A 10	先生が歌ってくれても合わせられなかった。	21.00 1<2**	.37 **	3.54 **	.71 **	0.34
A 11	先生の指示と自分の反応にタイムラグができた。	12.94	.43 **	2.52	.58 **	0.00
A 12	自分の声がきちんと先生に伝わっていなかった。	37.19 1<2**	.35 **	3.16 **	.49 **	0.71
A 13	見本の音がよく聞こえないことがあった。	5.26	.29 **	2.80 **	.41 **	1.19
B 1	他の人がレッスンを受けているあいだに練習することができた。	11.18	.68 **	0.90	.81 **	0.00
B 6	自分の手の位置や角度を修正しやすかった。	5.59	.29 **	0.13	.69 **	0.42
B 7	対面よりも緊張せずに演奏できた。	7.03	.48 **	1.81	.71 **	0.00
B 8	他の受講生の目を気にせずに演奏することができた。	17.64 1<2**	.55 **	0.60	.60 **	0.38
C 4	先生と 1 対 1 でレッスンを受けているようだった。	8.83	.28 **	1.04	.45 **	0.18
C 9	同じグループの受講生に励ましてもらえた。	17.20 1<2**	.58 **	2.23	.62 **	3.44 **
D 14	授業のために家族に協力してもらわなければならなかった。	4.00	.63 **	0.22	.76 **	0.21
授業の通信環境について（3 項目）						
15	通信状態が良好かについて気になることが多かった。	4.21	.52 **	0.77	.49 **	0.21
16	先生にちゃんと聞こえているか不安だった。	6.15	.43 **	2.24	.71 **	0.48
17	通信機器を置く場所がなかなかうまくいかずに苦慮した。	1.49	.50 **	1.28	.33	0.80
授業の時間外のこと（4 項目）						
18	時間外の指導にも先生にメールで気軽に対応してもらえた。	4.61	.38 **	0.58	.38	0.64
19	自分が演奏している動画を送ると、先生が指導してくれた。	4.42	.43 **	1.12	.62 **	1.03
20	授業のシステムを使って、先生が見本の動画を送ってくれた。	5.98	.42 **	0.22	.69 **	0.85
21	メールで指使いなどの写真を送ってもらい理解することができた。	23.68 2<1**	.65 **	0.74	.64 **	0.00
自宅での練習について（4 項目）						
22	家に居る時間が長いので、練習する時間が充分とれた。	8.00	.60 **	3.32 **	.36	0.71
23	昼間に家に居るので、近所迷惑にならずに練習することができた。	5.92	.46 **	2.59	.47 **	1.19
24	自宅では練習する気にならなかった。	2.78	.55 **	0.26	.52 **	0.21
25	他の授業の課題が多く、ピアノの練習をする時間が作れなかった。	5.11	.57 **	1.46	.46 **	0.21
自分の演奏技術について（5 項目）						
26	十分に弾けるようになった。	5.27	.33 **	2.49	.24	0.48
27	適正なテンポで弾けるようになった。	1.24	.37 **	1.47	.55 **	0.80
28	レガートとスタッカートができるようになった。	3.25	.39 **	1.96	.54 **	0.64
29	正しい指番号で弾けるようになった。	9.49	.40 **	2.14	.53 **	1.03
30	強弱を付けられるようになった。	1.53	.68 **	1.90	.34	0.85
オンデマンドのクラス授業について（3 項目）						
31	動画をくり返し何度も見た。	3.93	.48 **	1.82	.18	0.92
32	対面で教えてもらいたかったと思った。	5.49	.33 **	0.35	.28	1.24
33	音楽の授業内容をリモートで理解するのは難しい。	4.51	.34 **	1.39	.30	0.33
（後期に実施される）対面授業について（3 項目）						
34	対面授業では人前で演奏しないといけないので緊張する。	7.10	.40 **	1.84	.56 **	2.92 **
35	対面授業になっても自信を持って参加することができる。	19.27 1<2**	.39 **	0.00	.62 **	1.24
36	対面授業になって楽器が変わるとうまく演奏できなかった。	24.48 2<1**	.62 **	0.59	.06	1.38

A: リモート特有の指導の受けにくさ, B: リモート特有の参加しやすさ, C: 受講生との関係, D: 家族との関係 ** p<.01
 1<2: 「全くあてはまらない」と回答した 1 年生が多い、あるいは「よくあてはまっている」と回答した 2 年生が多い
 2<1: 「全くあてはまらない」と回答した 2 年生が多い、あるいは「よくあてはまっている」と回答した 1 年生が多い
 t 値が有意な項目は全て 1 回目 < 2 回目

= 3.32, $p=.00$)。

自分の演奏技術に関する項目では、項目 30「強弱をつけられるようになった」という項目の相関係数が高く ($r=.68$, $p=.00$), 1 回目と 2 回目の選択肢ごとにクロス集計して確認すると、回答者 100 人中 20 人が両方で 3 を選択しており、自己評価が曖昧なままであることが分かった。

7. 考察

7-1 教員と学生が感じたオンライン授業に関する所感の比較

研究 2 の 1 回目の調査において、同時双方向型のピアノや弾き歌いの授業では、他者がレッスンを受けている時間に練習することができたと回答している学生が多かった。2019 年度までの A 短期大学の授業形態は、授業時間内に個別練習ができない状況であり、他の学生がレッスンを受けている様子を見聞きし学ぶように指導を行っていた。研究 1 の調査において、教員が感じたオンライン授業のメリットとして、同時双方向型のピアノの指導では学生は例年よりよく練習している印象があると挙げられているが、授業時間内に練習時間を確保できたこともその一因であると考え。しかし、学生がお互いの演奏を聴き合うことは、他者への指導を自身の演奏に反映できることや、演奏を鑑賞し音楽的感性を養うといった教育効果がある。これらのことから、今後のピアノや弾き歌いの指導では、対面授業、同時双方向型のオンライン授業ともに、個人で練習できる時間を確保する授業回と、お互いの演奏を聴き合う授業回を確保する必要があると考える。

研究 1 の調査で、教員が「オンライン授業の現状」の「デメリット」として最も回答を多くあげた項目は、「同時双方向型は画像や音質の乱れがある」であった。一方学生は、研究 2 の 1 回

目の調査結果から、弾き歌いで自分の声がきちんと伝わっていなかったと感じた学生は少なかった。葛西 (2021, p.12) の調査では、学生が感じたデメリットとして通信環境の問題が挙げられていたが、それと比較して、本調査では、学生自身はそれほど通信環境の不調を感じていなかったことが特徴としてあげられる。A 短期大学の学生は、比較的早期から安定した通信環境で受講できていた学生が多かったことがうかがえる。さらに今後、オンライン授業の普及にともない技術面での改善が進むことで、通信環境に対する不安は低減していくと考えている。

研究 1 の調査結果で、教員が「デメリット」として 2 番目に多く挙げた項目が「演奏技術を伝えきれない」であり、強弱や一定のテンポを保つことを伝えきれないという印象をもっていた。また、3 番目は「同時双方向型は身体の使い方や顔の表情が確認しづらい」ということが挙げられ、弾き歌い時の学生の表情を確認しづらいと感じていた。身体の使い方や表情を修正するには、適時のフィードバックが必要であり、学生が個人で練習して習得しづらい技術であるといえる。

これらの同時双方向型のオンライン授業の「デメリット」から、教員は画像や音質の乱れ等の ICT 機器の特質を配慮して指導した結果、対面授業であれば伝えられていた演奏技術を学生に伝えきれなかったと感じていた。一方、研究 2 の調査において学生自身の演奏技術を問う質問では、演奏技術が身についたと感じている学生が多かったが、自己評価が曖昧な項目もあった。これらのことから、対面授業と同時双方向型のオンライン授業で指導する内容を分け、教員と学生間で共有することが必要であることが明らかになった。

研究 2 の学生の主観的な評価から、適正なテ

ンボや正しい指番号での演奏は、オンライン授業でも身についたと評価していた。しかし、レガートやスタッカートができるようになったか、強弱がつけられるようになったかといった項目については「どちらともいえない」と回答する割合が高く、オンライン授業だけでは学生が習得した実感を持てていないことが明らかになった。

研究1の調査において、教員はオンライン授業のメリットとして「授業外にメールでやり取りを重ね効率的な指導ができた」ことを挙げ、動画や指番号を書いた楽譜のやり取りをすることで教育効果が上がったと感じていることが分かった。しかし、研究2の学生への調査において、動画や指番号のやり取りをした学生はごく一部であることが示唆された。従来の対面授業においても、授業外での指導を申し出る学生はごく一部であることから、このように一部の学生だけが個別指導の対象になることは、オンライン授業特有の現象ではないといえる。しかし、コロナ禍の中、教員がICT機器の使用に慣れたことで、様々な指導方法を取ることができるようになったことは、今後の授業実施に向けて大きな成果だと考える。

7-2 学生のオンライン授業の捉え方の変化

研究2の1回目の調査の「オンライン授業特有の指導の受けにくさ」についての項目で、1年生と2年生を比較した結果、2年生の方がオンライン授業の指導を受けにくいと強く感じていた。2年生は、1年生の時に対面授業を経験しているため、対面授業とオンライン授業を比較した回答を得ることができたと考えられる。

2年生は2回目の調査でも受けにくさについて変化はなかった。1年生は、1回目の調査より、対面授業を経験した後期終了時の方が、オンラ

イン授業の受けにくさを強く感じるようになっていた。1年生、2年生ともに学生はオンライン授業より、対面授業の方が受けやすいと考えていることが明らかになった。練習時間の確保のしやすさなどオンライン授業のメリットはあるものの、授業そのものは、対面の方が受けやすいと感じる学生が多いことが示された。山内(2021, p.61)が学生を対象におこなった調査でも、今後受けたい授業形態として70.8%が対面授業を選択している。このような結果から、保育者養成校における音楽系科目では、当面の間、対面授業の形態を維持しながらオンライン授業のメリットを取り入れる方向で検討することが妥当であろう。

7-3 同時双方向型授業と対面授業の指導内容の分類

研究1で教員が同時双方向型のピアノや弾き歌いの授業の「デメリット」として挙げた項目は、「画像や音質の乱れがある」、「演奏技術を伝えきれない」、「身体の使い方や顔の表情が確認しづらい」があった。しかし、これらの「デメリット」を教員と学生が双方ともに踏まえ、指導項目のポイントを絞って授業を実施することで教育効果が上がると考えることができる。

コロナ禍以前にピアノ及び弾き歌いの対面授業で指導していた指導項目は、音色、リズム、速度、強弱、レガート奏法、スタッカート奏法、ペダルの踏み方、声とピアノの音量のバランス、教員の演奏の提示、読譜に必要な知識、運指、手指のフォーム、音高の違い、声の音程、演奏時の全身の姿勢の提示等である。

これらから、同時双方向型の「デメリット」を考慮した上で同時双方向型でも問題無く指導できる内容を抽出する。多くの教員がデメリットとして挙げた画像や音質の乱れに関係の無い項

目をオンライン授業で教えることが望ましいと考える。まず、「読譜に必要な知識」を指導することができる。また、学生はスマートフォンを使用し手元を写しているため、「運指」や「手指のフォーム」に関する指導ができる。また、画像や音質の乱れが生じて「音高の違い」や、「声の音程」は聞き取れるため指導できる。教員はパソコンやタブレットを使用しているため、教員が正しい「演奏時の全身の姿勢」を提示し伝えることができる。これらのことから、ピアノや弾き歌いの指導において、これまで対面授業で指導していた内容を、今後のブレンド型授業⁷⁾の実施に向けて、対面授業に適した内容と同時双方向型授に適した内容に分類した(図1)。同時双方向型の授業では読譜に繋がる音楽の基礎知識や基礎的な奏法を指導し、対面授業では主に表現力に繋がる演奏技術を指導できると考えられる。

今後のブレンド型授業では、図1を教員と学生が十分に理解した上で、対面授業と同時双方向型の授業を実施していくことで教育効果が高まると考えられる。今後の授業設計としては、対面授業を中心に実施するが、自宅で受講でき通学の負担が無い同時双方向型を数回取り入れる

ことが望ましい。

8. 今後の課題

2020年度のコロナ禍により、A短期大学では、予期せぬかたちでオンライン授業の実施に至った。その時期の学生と教員の反応や評価を検討するため、A短期大学の授業実施状況に沿ったインタビューと質問紙調査を実施した。各養成校におけるピアノの授業は、ある程度は共通しているところがあるが、この調査結果を般化するには慎重にならざるをえない。ひとつの養成校の2020年度の状況を質的、量的に分析した研究であり、保育者養成校のピアノのオンライン授業一般を検証するためには、調査対象を広げ、比較対象とするために他の科目のオンライン授業についても調査をするなど、研究方法の工夫が必要であり、今後の課題であると考えている。

付記

本研究は、以下に発表した研究に新たにデータを加えて再分析し考察を深めたものである。

・岩佐明子・命婦恭子(2021)「保育者養成校の音楽系科目におけるリモート授業の検討―教員

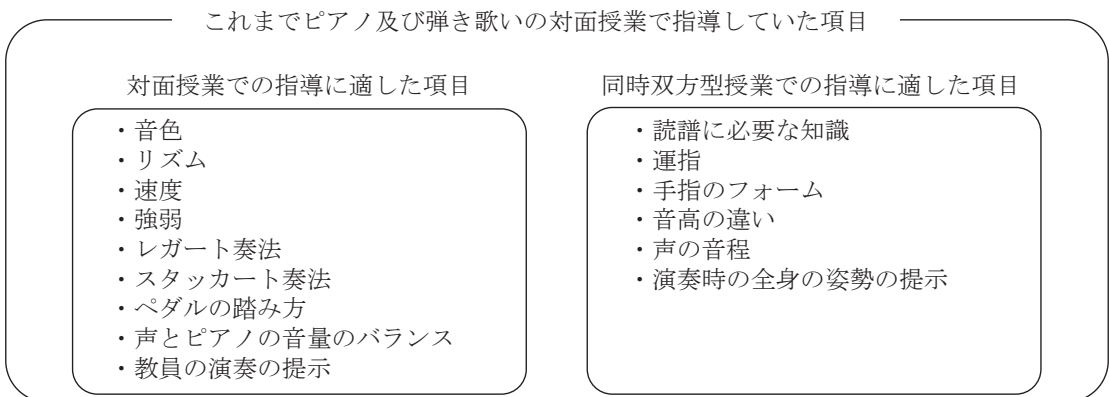


図1 ブレンド型授業に向けた指導内容の分類

が捉えた教育効果と課題―」日本保育学会第 74 回大会発表論文集, P-527-P-528.

・命婦恭子・岩佐明子 (2021)「保育者養成校の学生を対象としたリモートによる音楽教育についての質問紙作成」日本保育学会第 74 回大会発表論文集, P-245-P-246.

謝辞

本研究に協力いただいた A 短期大学の皆様に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 文部科学省が「面接授業」と示している教室で実施する授業形態を、本稿では一般に名称が知られている「対面授業」と記す。
- 2) 文部科学省が、令和 2 年 4 月 23 日時点で発表した「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」の調査結果に示されている。https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf (2021/9/9 にアクセス)
- 3) 同掲 2)
- 4) 日本私立大学連盟が開催した「私大連フォーラム 2020」の資料によると、文部科学省は、「遠隔授業」の主な形態として、「同時双方向型」、「オンデマンド型」の 2 種類を挙げている。<https://www.shidairen.or.jp/files/user/forum2020-2.pdf> (2022/1/28 にアクセス)
- 5) 大学教育のデジタルイゼーション・イニシアティブ (Scheem-D) は、文部科学省の Web サイトに詳細が示されている。https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/

sankangaku/1413155_00002.htm (2021/11/14 にアクセス)

- 6) A 短期大学では、web 会議システムとして Google Meet を使用している。
- 7) ブレンド型授業はハイブリッド型授業の一種であり、対面授業とオンライン授業を、教育効果を考えて組み合わせる授業方法である。<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php> (2022/2/9 にアクセス)

引用・参考文献

- 足立広美 (2021)「保育者を目指す学生の『ピアノの弾き歌い』の指導法に関する研究 (3) ～オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の課題及び配慮すべき点についての一考察～」『創価大学教育学論集』73 号, pp.15-26
- 葛西健治 (2021)「子どもの歌の弾き歌い指導におけるオンラインレッスンの試み―コロナ禍の授業実践における成果と課題―」『こども教育宝仙大学紀要』12 号, pp.1-16.
- 川内奈央子 (2021)「ピアノ個人指導における対面レッスン、オンラインレッスン、それぞれの利点、これからの活用について―コロナ禍におけるピアノ個人実技指導の実態」『大和大学研究紀要』7 巻, pp.37-54
- 小西知子 (2021)「保育者養成校におけるコロナ禍の弾き歌いの実践報告―オンライン、分散、対面授業の取り組み」『音楽教育実践ジャーナル』19 号, pp.52-60.
- 命婦恭子・岩佐明子 (2021)「保育者養成校の学生を対象としたリモートによる音楽教育についての質問紙作成」『日本保育学会第 74 回大会発表論文集』P-245-P-246.
- 山内信子 (2021)「音楽教育におけるオンライン授業の可能性と課題：保育者養成の学生と教員を対象としたアンケート調査から」『聖和短期大学紀要』第 7 号, pp.57-67.